

第9講 科学

読解演習

解答

問一 自分・客体・普遍

問二 ア

問三 宗教的儀式→助けている

問四 イ

問五 ⑤ 科学の知 ⑥ 貧困な精神

問六 イ

問七 神話の知・自分をも入れこんだ世界

問八 自然科学の知を自分に適用すると、自分の存在価値が無いこと。

問九 ウ

(二十九字)

解説

問一 「自分」を客観的な観察者として切り離れたからこそ、自然科学は普遍的な知識となったことを確認する。

問二 「なぜ、自分はこのような太陽の運行と関連する地球に住んでいるのか。自分は何のために生きているのか」という部分を言い換えたものを選ぶ。

問三 「勤め」の内容を、三十文字で、具体的に説明している部分である。

問四 線④の直後に「それは太陽の息子ということから生じてくる」とあるから、イかエに絞られる。しかし、「気品」とは「気高い品位」であるから、エの「安心感」は「気高き」とは結びつきにくい。したがって、イが正解。

問五 近代人の「知」と「精神」を表している語を探す。

問六 線⑦の直後に「その幼稚さを笑いものにすることができる」とあることから考える。「太陽の運行」を、科学的な話として「われわれは毎日、われらの父が天空を横切る手伝いをしている」と述べたら、近代人の科学から見ると幼稚に思えるであろう。

問七 コスモロジーを論じるときの、インディアンの強みについてまとめる。

問八

自然科学の知をそのまま自分に「適用」する。→ a
↓自分の存在価値の無さに気落ちさせられる。→ b

このあたりのことに気づいてくると、それを見出すために……
という流れを捉え、aとbの内容を入れてまとめる。

問九

ア 神話を否定することは、自然科学では捉えられないことをすべて否定することであり、心の貧しさにつながっていくといえる。

イ 自然科学の方法で、自分と世界を見ることは、自分を科学的に測定することであり、そうすれば存在価値の無さを思い、心の貧しさにつながる。

ウ 「自然をある程度支配できる」ことが、直接、心の貧しさにつながるわけではないから、これが正解。

エ 自分の存在価値の確認のために、「若いときには」などという安易な神話をつくるのは、心の貧しい生き方といえる。

重要語句

① 厳然……厳かで、動かしがたい様子。

例文→敗戦という、厳然たる事実を突き付けられる。

② 落とし穴……大きな過ちにつながら得るが、見逃していること。

例文→IT社会の落とし穴は、情報の膨大化であった。

③ 気品……気高く、品位があること。

例文→優勝者の表情には、気品が漂う。

④ 羨望……羨ましく思うこと。

例文→留学生試験の合格者は、羨望的だ。